報告事項　ケ

青谷上寺地遺跡出土盾に塗布された顔料について

青谷上寺地遺跡出土盾に塗布された顔料分析について、別紙のとおり報告します。

平成２０年９月９日

鳥取県教育委員会教育長　　中　永　廣　樹

青谷上寺地遺跡出土盾に塗布された顔料について

文　化　財　課

平成１０年度に行われた青谷上寺地遺跡の発掘調査で、弥生時代後期（１～３世紀）の溝から出土した木製盾２点について、詳細な顔料分析を依頼した結果、「緑土※」と呼ばれる青緑色の顔料が塗布されていることが明らかとなった。

※緑土：海緑石またはセラドナイトを主要な鉱物成分とする青緑色の顔料

記

１　分析結果

試料に含まれる化合物（鉱物）の種類、元素の種類、化学組成を分析し、総合的に顔料の特定を試みた結果、使用されている顔料が緑土であることが判明。

２　分析者

宮内庁正倉院事務所保存課　課長　成瀬　正和　氏

３　成果

・国内での緑土の使用最古例は、５～６世紀の装飾古墳壁画とされてきたが、その使用が弥生時代後期にまで遡ることとなった。→**緑色顔料使用の国内最古例**

・東アジアにおいても、緑土使用の最古とされていた平壌郊外の徳興里古墳壁画（４０８年）の時期を大きく遡り、日本国内のみならず**東アジアにおける緑色顔料使用の最古例**となる。

・弥生時代の顔料としては、赤色（朱など）黒色（黒漆など）が確認されているが、弥生時代後期になって緑色が使用されていたことが確実となった。

４　講演会

（１）日時　平成２０年９月１３日（土）午後１時３０分から３時

（２）場所　鳥取市青谷町総合支所多目的ホール

（３）講師　宮内庁正倉院事務所保存課　課長　成瀬　正和　氏

（４）演題「青谷上寺地から正倉院まで～わが国における顔料の歴史～（仮題）」

緑土の使用が明らかとなった盾

A6094：赤色顔料（水銀朱）を塗布した後に緑色顔料（緑土：黒く見える部分）を塗布

長さ：４０cm、幅：１０．４cm
厚さ：１cm、材質：モミ属

出土時の状況

B5773：全面に緑色顔料（緑土：黒く見える部分）を塗布

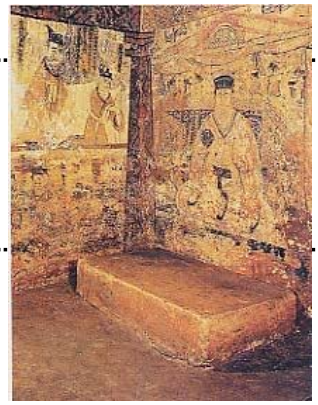
長さ：８８．１cm、幅：８．５cm
厚さ：１．１cm　　材質：モミ属

出土時の状況

日本・朝鮮半島における緑土の確認例

熊本県・千金甲(せごんこう)1号墳

赤・青・黄の三色で彩色された同心円や靫（ゆき：矢を納めるための細長い筒）の文様が刻まれている。



高句麗・徳興里(とっこり)古墳

被葬者、騎馬射的、神への貢ぎ物をささげる儀式などが壁に描かれている。

鳥取県倉吉市北野(中西)埴輪

鉄鋲をつけた兜、みずら、首に玉飾り、胴部には鎧を表現しており、顔面と胴部には赤色と緑色の彩色が施されている。